戦前の日本人学者の研究あるいは戦後の台湾の研究者の努力などによりかなり明らかになったが，こと淡水藻となると，調査は断片的で我々の知識は極めて不完全である．著者の山岸高旺博士はここ数年4回に亘って渡台し，中華民国政府環境保護署の協力を得て，延べ約2か月滞在し，淡水藻類の調査研究に従事した．採集場所は50余で，池，灌漑用水，養魚地，湖沼，ダムなどほぼ台湾全土に及ぶが，本書では台湾西部と東部の池と養魚地29地点の藻を扱い，種組成のやや異なる湖沼とダムの藻類は後報で扱うと序言で述べている．なお，書名は浮遊性藻類であるが，扱われるのは淡水産の藻である．本書は前半の178ページに種の記載と文献表があり，後半は写真とスケッチで占められる．種数は藍藻類52，黄金色藻類11，黄緑藻類6，ユーグレナ藻類165，緑藻類298，計531種で，珪藻類は扱われない．先に日本淡水藻図鑑の編集者として日本のこの分野の研究の進展に寄与するところが大きかった著者の山岸博士は，今回台湾の淡水藻の研究にも大きく貢献することとなった．このことは日本の淡水藻の種分類，種分化の研究にも貴重な基礎資料を提出したことになり，本書刊行の意義は大きい．（千原光雄）

□吉山　寛著・石川美枝子画：**原寸イラストによる落葉（おちば）図鑑**　372 pp.　1992年12月初版，1993年2月第22版，〒162 東京都新宿区西五軒町13–10 文一総合出版，¥2,500（税込）．21×11 cm.

本州で見られる樹木のうち，高山植物や分布の特に狭い種を除いた528種の画と，それに関係のある72種，合計600種を分類順に紹介したもので，野生種を主としているが，街路樹や庭木なども含まれている．落葉と銘打っているが，落葉樹とは限らず常緑樹も入っている．各ページには大きな葉が1枚か，時には2–3枚が載っていて，複葉には小さく示した全形と大きい小葉片といった具合．ここで特徴的なことは，ほとんどの葉が原寸大（ホオノキのような特大のものはやや縮小して）で出ていて，葉形・葉脈・葉縁・毛などの様子が植物画家石川氏の線画によって実によく描かれていることである．着色はないが読者には実物と「絵合わせ」することによって「あっ，これだ」とすぐ木の名がわかるという寸法である．ページを繰っていると，原色図鑑よりはるかに瞬間的な印象が強く，葉形が脳裏に焼き付けられる．この点最近流行のカラー写真図鑑などは足下にも及ばない．画で現せない葉の厚みや光沢・色，さらに樹皮・樹形その他の特徴，分布など簡明に画の傍らに記載されている．一般に樹木は草本に比べて花の時季を失することが多いが，葉の方は落葉を含めて年中簡単に見られるので具合がよい．しかも葉の特徴は案外はっきりしているものなので，本書と絵合わせすることによって訳なく種類を当てること請合いである．細長い変形版だが，手に持ってパラパラめくるには手頃な形である．良い本である．（伊藤　洋・金井弘夫）